

## 【入選】

### 「エンブリさん」を読んで

宇土市立走潟小学校 5年 高田 さくら

この話は、昭和10年に球磨郡須恵村に来た二人のアメリカ人、エンブリ夫妻の話です。二人は農村についての研究を行うため須恵村に住むこととなります。しかし、村の人たちは、聞いたことのない言葉を使う二人に、めずらしいとか、こわいといった気持ちを持ち、関わろうとしませんでした。二人が村祭りに加わろうとしても、大人も子どももにげ、一言も話すことができません。しかし、二人は様々な努力をする中で、村の人たちと親密な関係を作っていくのです。

この本を読んで、わたしの印象に残ったことが二つあります。

一つ目は、エンブリ夫妻が村の人々と仲良くなるため、様々な努力をしたところです。村の人からさけられる中、二人はいつまでもくよくよせず、どうすればよいか何日も話し合いました。そして二人は、球磨の言葉を覚えたり、球磨の民謡を歌ったり、おどりをおどったりと球磨の人たちと仲良くなるための努力をしました。すると、村人の二人を見る目が少しずつ変わっていき、よい関係ができました。わたしにもこの「エンブリさん」とにたことがありました。わたしは、2016年に起こった地しんのえいきょうで、走潟に引っこしてきました。最初は、仲良くなれるか不安でしたが、ほとんどの友達がやさしくしてくれて、休み時間には、「遊ぼう。」とさそってくれました。さそってくれたときはとてもうれしかったです。しかし、最初にあまり仲良くできない友達もいました。どうしようか考えていましたが、勇気を出して話しかけてみると、すぐに友達になれました。そして今では一番の友達になり、一緒に遊んだり、楽しくおしゃべりをしたり、一緒に勉強をしたりしています。一緒にいると、とても楽しいです。

二つ目は、エンブリ夫妻が、村に橋をかけるための寄付をしたことです。村の人たちは村に橋をかけようとしませんが、予算が足りず寄付をつのります。その中でエンブリさんにもおねがいしようという話が出ますが、みんな「最初、のけ者あつかいしていたからむりだろう。」という話になります。ところがエンブリ夫妻は「村のお役に立ててうれしいです。」と寄付を引き受けるのです。そのことがあり、エンブリさんと村の人たちの関係が深くなっていくのです。そして、その関係は、その後何十年も続いていくことになるのです。わたしも、エンブリさんと村人のように、仲良くなった友達と何十年たっても友達でいたいと思いました。

この本を読んで、人と仲良くなるには、自分から話しかけたり、やさしく接したりすることが大切だということを感じました。これからも友達には自分から話しかけて、たくさん友達と何十年も続く関係を作りたいと思います。